

「マスコミ」

東奥日報社論説副委員長
工藤英寿

ただいまご紹介をいただいた工藤でございます。私は皆さんとは畑違いの新聞社の人間でございますが、実は、私の父親が若い頃青森営林局管内に8～9年勤務したことがあり、父親の古巣へ伺ってお話をするというので、いささか緊張しております。私緊張した際には、緊張をほぐす意味で「土人三話」と言っております話をしております。南洋にはジャングルがあり、猛獣などもありますが、南洋の土人は、そんなものは怖がらないそうです。その土人が日本のような文明社会へ出て来たときに怖がるものがあるそうです。それは、総入歯を外してニタッと笑うことです。歯というのは歯ぐきから生え揃っているものなのに、なんで痛がらないで外してニタッと笑うんだらうということ、怖がるんだそうです。

その南洋の土人が、青森へ来て浅虫の海岸を見物しておりましたら、東北線の列車が猛スピードで走って来たのを見て、「あの動物は何だろう？、そしてオスだろうかメスだろうか」という話になりました。そのうちに、その列車はうとうトンネルに入って消えたのを見て「わかった、わかった、オスだ」となったそうです。

その南洋の土人がしばらく青森に滞在しましてから、故郷へ帰るに当たり、おみやげは何にしようかという話になりました。土人達の全員一致したものがあったそうです。それは水道の蛇口だそうです。青森の水は日本一ウマイ水だと言われておりますが、その新鮮な水がヒネルとジャーと出るということで、競って買って南洋へ持ち帰ったという話です。

私は、営林局の審議委員を二つ程やらしていただいておりますが、森林のことについてはひどくうとい人間でございます。南洋の土人のようなコッケイなことをやっているのではないかと大変心配している次第です。毎日の新聞の仕事についてもよく物を知らないためにチョイチョイやっているのではないかと、十分に役割を果たしていないのではないかと反省の気持ちを持っております。

さて、本日の私に課せられた演題は「マスコミ」となっておりますが、マスコミの一端に籍を置く私にとって改めてマスコミを論ずるのはいささか気が進まず荷が重いので、日頃私が苦勞していることを申し上げてマスコミとはどういうものかをお汲みとりいただければ幸いです。

青森営林局は、明治19年に青森大林区署としてスタートしたようですが、東奥日報社は、2年後輩の明治21年に出来まして、一昨年に100周年を迎えました。地域と共に歩んできた新聞でございまして、東北では、秋田県の秋田魁新報に次いで2番目の歴史を持っています。発行部数では、宮城県の河北新報が一番で東北各県にも入っておりますが、東奥日報はその次になっております。東奥日報は、朝刊と夕刊が完全セットになっておりまして朝・夕刊共25万部を超える発行となっております。この制作には、500人が携わっております。

新聞紙面には大きく分けて2つの役割があります。一つは報道ということで、世の中の出来事取材して記事にし、紙面にのせて読者にお伝えするニュース・話題の提供、もう一つは、言論ということで世間の出来事に対し、これはこういうことではないでしようかと解説したり、これについては、こう考えますと意見を述べたりすることです。報道と言論は車の両輪のように、新聞紙面のどちらが欠けてもならない大きな役割を持っております。

東奥日報社の報道を担当する人は、本社の政経部・社会部・文化部・写真部など、及び支社・支局の外勤記者等で100名近い人数が担当しております。これに対し、言論の方は、社長直属の論説室が担当しておりまして、4人でやっております。論説室の担当は具体的には社説とコラム（天地人）で、社説は3人が交替で書き、コラムは、入社歴の長い者が担当することになっていて、私が今担当しております。3人の社説の担当者も、1人のコラム担当者も、政治が不得意でも国際問題が弱い人でも順番に当たった人は書かなければならない訳で、特にコラムは1人で総ての分野をしかも世の中の出来事に合わせ、いろんな分野をバラエティがあるように工夫しながらとり上げて行かなければなりません。

一日のうちでも朝と夕方ではニュースの違いがありますので、なるべく遅い時間まで引きつけて、タイムリーなものを書くようにしております。

社説は、おおむね専門家の人に読んでいただく、コラムはご婦人・お年寄りから子供まで誰にでも読んでいただくという考え方で

書いておりますが、やさしく、そして面白く書いてくれという要求があり、従ってお年寄りでも中学生でも読んでなる程と思うように書くよう心掛けております。

社説は明治21年の創刊号から続いておりますが、コラムは、昭和16年4月からですので、社説の半分位の歴史です。今「天地人」という名になっておりますが、これは昭和初年から終戦まで社長を努めておりました山田金次郎が命名しました。「天を恐れ、地に即し、人を愛す、大局高所から“もの“をみる」からとったもので、その意味は「天を恐れ」とは、真理・真実を踏まえろ、「地に即し」とは、現実的であること、郷土の人の利害と一緒に歩めと、「人を愛す」とは、郷土の先人や一生懸命やっている人を愛すこと、高い所から眺めて結論としてはこうだということを見とどけて仕事をせよ。という意味だろうと思って日頃原稿を書く心掛けとしております。

酒にカクテルというのがありますが、その一つにジャーナリストカクテルと呼ばれるものがあるんだそうです。いろいろな種類のものを少しずつ混ぜて最初の酒の味とは全然違う味となるように、我々の仕事は広く浅く農業でも経済でもスポーツでも国際問題でも各方面をかじっていないければならないのです。それでいて詳しく聞いてみると殆ど知らないというのが新聞記者には案外多いものです。

コラム担当者は、一人きりで総てをこなしておりますので、時にはお叱りの電話をいただいたり、もっと知りたい等のお手紙をいただいております。一例をあげますと、先日横内方面でダンプカーが居眠り運転をして停車していた乗用車に追突し、乗用車に乗っていた3人を死なせた事故がありました。丁度交通安全期間中でもありましたので、『巨大なダンプを運転するのに、居眠り運転するとは運転手としてのハンドルを握る資格がない』という一寸キツイ言い方で書きましたら、ダンプの運転手さんから電話がありまして「私もダンプを運転していますが、ダンプの運転手は労働条件が過酷だ。そのことを書いた上で叱るなら仕方ないけど、



ただハンドルを握る資格がないとは一方的でないか」と文句がありましたので、「それにつきましては、別の機会にそういうことも調べて書くことにしましょう」と返事しましたが、なかなか承知してくれませんでした。その事件は、あとで解ったことですが、その居眠り運転手は酒も飲んでいたので、正にハンドルを握る資格がなかったと思います。

また、ご年輩の方からは、日本人なのだから、日本語を使えば良いのに、外来語をカタカナで使っていて、中味が解らないという苦情もあります。これは私も同感です。今、青森県では環境庁の通達に基づきまして、「アミュニティ・マスタープラン」というものを策定中ですが、この「アミュニティ」とは、快適環境という意味です。青森県には「あずましい」という方言がありますが、アミュニティマスタープランというよりは、『あずましい故郷づくり』と言った方がピンと来るのではないかと思います。

昨今の時事問題においては、国際化の時代であり、国際的な問題を勉強しておかなければならない大事な時期ではないかと思えます。一昨年あたりから、世界全体が平和指向となっていておまして、戦争を止めたり、軍縮を進めたり、はたまた、アメリカとソ連のトップがお互いに訪問し合ったり、ソウルでは、東西両陣営が集まってオリンピックを行うなど、更に、昨年12月には、イタリアのマルタ島でアメリカのブッシュ大統領とソ連のゴルバチョフ書記長が会談しておまして「ヤルタからマルタ」へと、冷戦から軍縮へと進んで来ております。また、ベルリンの壁の崩壊というのもあります。このことは、東ヨーロッパの社会主義国が次々と変容を遂げて、共産党の一党独裁から複数政党を認める方向や、議会にも変容して来ています。個々の内容をみますと、いろんなむづかしい内容があるようでして、すべてを深く消化するには相当の労力を必要とするので、私のようなジャーナリストカクテルとしては「こぼなし」と結びつけて覚えることとしております。例えば、マルクスは、ベルリンの壁の東側には「共産党宣言」を残し、西側には「資本論」を残したとか、ソビエトのこぼなしでは、生活物資が不足していることから、ソビエトから人がどんどん他国へ出国して行く動きがあるが、このことに関してゴルバチョフ書記長夫婦の会話の中で、ゴルバチョフ書記長「みんないなくなっても、2人は残るだろうな」、夫人「2人というが、一人は解るがもう一人はだれ？」と。このことは、奥さんも出て行くんだということです。ルーマニアのこぼなしでは、買物

に行った奥さんがしばらく歩いた後、空っぽの買物かごを見て「あれ？私は今買物に行く所だったか、それとも帰る所だったのかな？」と考えたそうです。実は、社会主義国では軒なみ物資不足で、買物に行っても買えないで、帰路も買物かごの中が空であったことから、このようなこぼなしとなったものです。アメリカにもこぼなしがありまして、今、日米経済摩擦で大変なようですが、ブッシュ大統領が3年間眠り続けてから目を覚ましたとき、側近に「天下の状態はどうか」とたづねたら、側近は「世の中は平和で、みんなうまく行っていますよ」と答えた。「景気はどうだ」と聞いたら「景気も大変結構です」という。ブッシュ大統領は、更に「郵便代はどうなっている」と聞かれたそうで、側近は「封書は62円、ハガキは41円です」と答えたそうです。このことは、アメリカは日本に征服されていたというわけです。経済で日本がアメリカを押さえ込んでいるということです。また、中国のこぼなしとしては、天安門事件の頃連日多数のデモがあり、政府の人達は困り果てておりました。趙紫陽書記（当時）が、実力者である鄧小平に逢って「どうしましょか」と相談したら、鄧小平は指を2本出したんだそうで、趙紫陽は「200人ですか（200人殺しますかの意）」と聞いたところ、鄧小平は、首を横に振った。「2,000人ですか」と聞いたら、又首を振った。「それでは2万人やるんですか」と聞いたら、鄧小平は「2人だよ」と言った。2人とは、趙紫陽の息子と鄧小平の息子を殺せばいいんだという意味であったんです。何故かということ、中国では「官倒」という役人ブローカーが横行していて、党の幹部の息子達が親の七光りで物資を安く入手して、数倍で売り大儲けをしていて、そのことも民主化要求につながっていたからなんです。このように、東ヨーロッパでは、共産党の独裁が変化しはじめ、市場経済が導入され貿易も盛んになり、軍縮が進み戦争がなければ世界中が豊かになっていく感じですが、アジアにおいては、中国や朝鮮半島が世界の動きから遅れている感じですよ。

私は少年時代に10年程中国大陸で暮らしておりましたので、中国のことに関心を持って資料を集めております。中国は日本と比較すると面積で25倍、人口は11億人で9倍を抱えておりますが、歴史的には日本のルーツみたいに感ずるところがあります。それは雲南省という中国では一番南に位置し、ミャンマーとかラオスに接している地方です。昆明という岩木山より高い所にある人口数十万人の雲南省の省都ですが、昭和58年に行った時に、

この雲南省が日本のルーツではないかと感じてきました。その一部を紹介しますと、世界で初めて米をつくった原産地が雲南省で、その米は赤い米です。日本では、おめでたい時に赤飯を炊きますが、この赤飯を炊くというのは元々の米を俵ぼうというためだという説もあるようです。もう一つ日本人の愛好する日本ソバの原産地も雲南省らしい。(別の説もありますが)更に、お茶も薄い煎茶のプーアル茶が原産地です。土佐犬・秋田犬などの日本犬も原産地は雲南省です。又、日本人自身も雲南省がルーツらしいものがあります。それは、日本人は幼少の頃にお尻に青アザがあり、これを蒙古斑と呼んでおりますが、この蒙古斑は蒙古と日本人に多いことになっております。関西のある学者の説によると、雲南省に一番多いそうで、そういう意味からいうと雲南斑と呼ぶべきだという意見もあります。又、日本に多くある神社の鳥居も雲南地方にあります。そのほか、「歌垣」とか、「桃太郎物語」に似た「竹太郎物語」みたいなものもあり、日本と雲南地方とは非常に共通することが多いことから、この雲南地方が日本のルーツではないかと資料を収集しているところです。

冒頭に「ウグイスがウガイをする激戦地」という時事川柳を紹介しましたが、この川柳も上手に覚えておくと状況把握にプラスになり、仕事に役立てております。昨年はリクルート事件もありまして、首相が竹下から宇野・海部さんと変わりましたが、宇野さんを読んだ川柳に「中曽根町竹下通り宇野酒店」とか「私は小指で総理を辞めました」というのもありました。又、幼児誘拐事件で愛知県豊橋警察署では犯人を追い詰めながら、とり逃がした事件についての川柳として「ヘリがあり、パトカーがあり、知恵がなし」というのもありまして、状況把握のためには、そのような小道具も利用しております。

私、論説の方を担当してから、営林局の審議委員をさせていただいておりますが、ジャーリストカクテルのような者でございませぬので十分な意見を申し上げられませぬ。しかし、私にとって好都合なことは、森林とか自然に接する機会ができたことです。大地に足を踏みしめて小さいヒバがすくすく育っているのを見たりすると、自分にとって生きた知識が得られ自然にも目を向けるようになってきたことです。例えば、岩木山の姿というのは、弘前とか国道7号線から見る流麗な稜線の津軽富士で一番なじみがありますが、白神山のことで歩いたときに西海岸の方へ行きましたら、だんだん形が変化してきて、秋田県側から見た岩木山は鉛筆

みたいにとがっておりましたので、そのことを書きましたら読者からお手紙をいただきました。また、私の友人で森林博物館の初代館長をした工藤芳美さん（営林局OB）という方から「メタセコイヤという木があるが、面白いから勉強してみろ」と言われまして資料を頂きました。勉強してみましたら、非常に面白いことが分かりました。メタセコイヤは5, 000万年位前には北半球にあったのが、100万年位の氷河期に滅んでしまったと思われておりましたが、終戦の頃に中国に一本生き残っておりまして、中国とアメリカの学者が研究し、戦後アメリカから日本に入ってきたというんです。青森県にも相当植えられておりますが、古川の中三デパート付近に60数本が並木として植えられております。並木として植えられているのは全国でも珍しいようでしたので、そのことを書きましたら、すごく反響がありましてその後2～3回続けて書いております。

市民の方々は、森林・自然に対し相当関心があるんだということので、私も改めて勉強していかなければならないと思っております。

全国の新聞社のコラムの中から、優秀なものを切抜きして集めた月刊雑誌が日本ミックという会社から発行されておりました。毎日のコラムのうち1ヶ月に2本から5本位で平均3～4本が選ばれております。学校の点数のように2本しか選ばれないときは2点で落第かな、5本選ばれると5点法の5点をもらったような感じになります。この切抜きの雑誌の掲載率を毎月注意しながら見ております。

街の書店に行けば、森林のことについてかなり平易に書かれた本があって、そういうのを買って読んでおりますが、おぼろげにアウトラインは解るんですが、非常に複雑でむづかしいところもあり、なかなか核心に迫るところまでは行かないけれども、勉強する気だけは人一倍あります。専門家だけではなく一般の人にも伝えたいことがございましたら、声をかけてただければ大いに取り上げて行き、そのような中から自分も勉強して、審議会でも一人前の物を言えるようになりたいと思っております。